▲教室メンバーが手作りした全てのマスクには、メッセージも添えられていた。

マスク不足を手作りで対応 困ったときは助け合いも大切

原﨑 律子 さん

白羽区で洋裁教室（アトリエわくわく）を開いている原﨑律子さん。教室メンバー約50人が手作りした布マスク230枚を４月22日、市に寄付した。原﨑さんは「大変なときだからこそ協力したいと思いました。困ったときは助け合うことが大切だと思うんです」と話した。

原﨑さんは４年に一度、教室メンバーが手作りした作品をお披露目するために展覧会を開いている。開催のために大勢の人から協力を得る中で新型コロナウイルスが流行。市内ではマスク不足が問題となった。そこで原﨑さんは、これまで協力してくれた人たちに恩返しをしたいと思い、教室メンバーとマスクを作って寄付することを考えたという。「マスクがないなら手作りするしかありません。作ってみると簡単で、教室メンバーと楽しく取り組めました」と話す。続けて「周囲の人の協力のおかげで寄付ができました。困ったときはお互いさまですね。何かあればまた協力させていただきます」と笑顔を見せた。

私たちは今後、このウイルスとうまく付き合っていかなければならない。一度しかない人生を笑顔でより良く過ごすためにどうしたら良いか考え、アイデアを生活に取り入れていく必要がある。

例えば、パソコンやタブレット端末、スマートフォンなどのインターネットを有効活用することだ。外出自粛を強いられ、当たり前だった「直接会って話す」ことが制限された。そんな中、「リモート会議」や「オンライン飲み会」などインターネットを介した取り組みが世間で数多く考案され、今では定着しているものもある。

いつの時代も人類はさまざまな感染症や災害を乗り越えてきた。ウイルスによってこれまでの生活が一変した現在、「今あるもの」や「できること」を踏まえ、知恵を絞って行動し、状況を好転させる力が私たちには求められている。今回の取材に協力してくださった人たちの話には、これが随所に見受けられた。

厚生労働省が発表した「新しい生活様式」。これは、あくまでもウイルス感染を予防するためのガイドラインである。これを生活の基本としながら、一人一人がアイデアや工夫を凝らし、楽しく充実した「新しい日常」を創り出していってほしい。

子どもと一緒に楽しめる 自宅でお家キャンプを実施

千葉 真太郎 さん

白浜区に住む千葉真太郎さんは、家族との自宅時間を充実させることができた１人だ。千葉さんは、もともと趣味でサーフィンや釣りなどをたしなむアウトドア派。山で野営を張ることもあるという。

千葉さんには、中学１年生の娘と小学４年生の息子がいる。学校が休校となり時間を持て余した子どものために、自宅の庭でアウトドアを楽しめる『お家キャンプ』をしてみたという。「この状況で子どもを喜ばすためにはどうしたら良いかを考えましたね。『お家キャンプ』は、ちょっとしたスペースがあればどこでもできます。本格的なキャンプとは違いトイレやお風呂、Wi-Fiなどが完備されており、家に戻れば必要な物がそろいます。キャンプが初めての人や小さい子どもがいる家族、キャンプ場に行く時間がない人でも簡単にできるのでおすすめです。子どもと同じテントの中に入ると自然と距離も縮まります。普段話せないような会話もできました。またやりたいですね」と笑顔で話した。